

SPECIAL REPORT

IDFワールドデーリーサミット 2019イスタンブールの概要

2019年度の国際酪農連盟（IDF）ワールドデーリーサミットは、Milk for Life（いのちのミルク）をテーマとして、トルコ最大の都市イスタンブール（ヒルトン・イスタンブール・ボモンティホテル&会議センター）において9月23日から26日の4日間にわたり開催された。わが国からは、52名の酪農乳業関係者が参加した。

1. サミットのテーマ「いのちのミルク」とは

乳は、タンパク質、炭水化物、ビタミン、ミネラルおよび脂肪のような必須栄養素を豊富に含んでいる。これらの栄養素は、人体の形成に有益であるだけでなく、乳を摂取すれば心臓の健康も増進できるなど、乳は奇跡を起こす生産物であることは明らかである。

乳・乳製品は、これら栄養的な豊かさの増進以上にあらゆる社会の福祉と繁栄の観点から極めて重要な役割を果たしている。持続可能な酪農乳業は、乳の生産および加工段階において様々な関連産業を創出する。

最大10億人が酪農場で生活する一方で、酪農乳業とその関連産業のバリューチェーン全体には予想以上の価値が生まれる。この点で世界の多くの共同体、地域および国々において、経済成長の観点からも大きな役割を担っている。乳・乳製品の価値を人間の食事における栄養面だけに止めることや、栄養素という領域のみに限定することはできない。

以上のように乳は、私たちの生活の舞台裏でより多くの価値を有している。これらの理由から、本年のサミットでは、「いのちのミルク」というテーマのもと、食品安全、持続可能性、農場管理および環境、とりわけ栄養、酪農政策・経済、経済および地域農村の開発に与える影響など、乳に関連するあらゆる話題を取り上げた。

2. サミットの特徴

本年のサミットには、日本を含め世界50数カ国より950名が参加した。そのうち海外の酪農乳業関係者は650名であった（IDFトルコ国内委員会による）。

参加国数と海外からの参加者数は例年並みであったが、開催国トルコからの参加者数は例年に比べると少な

かった。国別の参加者数は公表されていないものの、日本からの参加者数は52名で引き続き多く、サミットの成功に貢献していると言える。

トルコは生乳生産量2,000万トンを超える酪農大国でありながら、サミットの開催は初めてということもあり、トルコ農業大臣が開会式に出席するなど、サミット開催を契機に国内の酪農乳業をさらに盛り上げようとする様子が見られた。

また、講演テーマの構成にも特色がみられた。本サミットでは、これまで主流であった科学的研究成果の講演に加え、持続可能性の観点から酪農乳業問題に言及する講演がなされ、参加者の注目を集めた。これは、昨年の特ジョン・サミット（韓国）の開会式において、前国連事務総長の潘基文氏が基調講演のテーマとした「SDGs and the Dairy Industry」（持続可能な開発目標と酪農乳業）を、さらに分野ごとに分けて講演会を構成したといえる。SDGsに対して酪農乳業が具体的に貢献できることを、世界レベル、各国レベルで、いかに進めるべきか、あるいは進めているかを、このサミットを通して情報共有しつつ、今後の活動に知見を与えたサミットであった。

他方、講演日数が例年のサミットより半日少ないこと、質疑応答やパネルディスカッションに多くの時間を割いたこと等により、講演者数は例年の約半分（9セッションで50名）であった。日本からは、川上教授（共立女子大学大学院）が「乳・乳製品のたんぱく質の利点」をテーマに講演した。

ポスター発表数は60点であり、そのうち4点は日本からの発表であった。このような状況のなか、谷本教授（山梨大学）のポスター発表（ヤマブシタケ凝乳酵素によるモツアレラチーズのレオロジー特性に関する研究）が、ポスター賞（第3位）を受賞した。

サミット開幕前には、IDFビジネスミーティング（IDF常設委員会会議及びIDF特別作業部会会議）とデーリーファーマーズプログラム（テクニカルツアー及び酪農家円卓会議）が開催された。

なお、サミットの運営に関しては、特に大きな混乱はなかったものの、開催国側の事前準備が不十分（参加登録確認書の送付がない、講演者や講演演題の発表が直前など）、ポスター発表の場所がサミット開催のフロアと異なるなど、改善すべき点もみられた。

3. 主な講演内容

（1）世界の酪農情況

フランス酪農乳業協会（CNIEL）経済部門長のRichard氏が、50か国の集計データを分析した「世界の酪農情況報告書2019」を基に、世界の酪農情況について



トルコ農業大臣（Dr. Bekir Pakdemirli）の歓迎挨拶

講演した。

- 2018年の生乳生産は、インドでの目覚ましい増大が見られたものの、世界全体では2.4%と緩やかなものであった。
- 旺盛な需要によって乳製品在庫はかなり減少した。
- 2019年の伸びは鈍化しているものの、2018年の乳製品貿易量は5%増加した。
- 乳製品価格は高い水準で推移した（2018年におけるバターと脱脂粉乳の価格差は大きかったが、2019年の差は縮小）。
- 2019年の生産増加は緩やかとなるが、貿易の拡大も減速するため、世界全体の需給は均衡する見込みである。

(2) OECD-FAO農業見通し（2019~2028）

OECD農業・食品貿易及び市場部門長のBrooks氏が、2019年から2028年（10年間）の世界市場及び国内市場の見通しを講演し、次のことが強調された。

- 世界の生乳生産は10年間で22%の増加が見込まれる。とくにインド及びパキスタンの増加が期待される。2027年には両国の生乳生産量は世界の生乳生産量の32%を占めるであろう。
- 世界の乳製品貿易量におけるEUのシェアは、27%から29%に増加するだろう。
- バターの名目価格及び実勢価格は、今後10年間に於いて減少するだろう。
- 脱脂粉乳の価格も減少するだろう。
- 強い需要が、大規模酪農家における生産の拡大を促進するだろう。

(3) 世界の消費動向

「消費動向に関する質問状」に対する、日本を含む各国のIDF国内委員会からの回答結果を取りまとめた中間報告がなされた。

- 消費者の声が政策や消費傾向を決め始めている状況になったが、科学と栄養が無視されないようにする必要がある。
- ある消費者層は科学や栄養を無視して消費を形づくり始めている。乳・乳製品は明白な、科学的に証明された健康効果を持ち、人間の食事の重要な部分を占めている。したがって酪農乳業界は、消費が科学や科学的根拠に基づいて形づくられるようにしなければならない。
- 乳の価値に疑問を投げかける一部の消費者層と世界の一般的な消費者層とは明確に区別すべきであり、疑問を投げかける消費者層によって惑わされないようにすべきである。

(4) トルコの酪農乳業

アンカラ大学教授のArtik氏は、トルコの酪農乳業の特色を次のとおり報告した。

- 生乳生産量は世界で8番目、欧州の中では3番目に多い。
- 重要な輸出乳製品はチーズ、ホエイパウダー及び粉乳であり、輸出先は中東諸国である。輸出総額は3億2,500万ユーロ以上である。
- 輸入総額は約9,200万ユーロで、バターとチーズが中心。主としてニュージーランドとウクライナから輸入する。

(5) SDGs達成に向けて

FAOのTekola氏は、持続可能な開発目標（SDGs）に対して、酪農乳業は多くの貢献ができるが、その貢献の最適化のためには注意深い計画、実行及びモニタリング

が必要であることを強調した。

(6) 地球温暖化への農業の影響評価（メタンを事例として）

オックスフォード大学環境変動研究所のHornsby氏は、地球温暖化に関する議論においてはメタンの影響を正確に反映していないと強調し、メタンのような温室効果ガスをこれまでより正確に測定できる新しい方法を紹介した。

4. 酪農家円卓会議

世界の酪農家が一堂に会し、各国が抱える課題について意見を交換し、情報を共有することを目的とする円卓会議が開催された。この会議には、サミット開催国トルコを始め16カ国から48名が集い、日本からは7名が参加した。

会議では3つのテーマが設定され、日本の参加者からも活発な発言がなされた。主な意見は次のとおり。

(1) 家畜の権利、一切の動物性食品を拒否する『ビーガン』の隆盛について

- ・日本では、乳牛の福祉が大きな社会問題になっていない。
- ・豆腐に代表されるような植物性たんぱく質を摂取する伝統的な習慣がある。
- ・牛乳を排除するための新たな選択肢として、植物性タンパク質を摂取するという消費者は少ない。

(2) 気候変動や温暖化を中心とした環境リスクへの対応について

- ・水質汚染は、他国と比較して水資源が豊富なことから、大きな社会問題になっていない。
- ・堆肥は、牧草地などへの還元、近隣農家への提供などにより、全体としては循環している。
- ・一方、耕作放棄地の増加や経営規模拡大により、還元農地の確保が課題になっている地域もある。
- ・メタン発酵や焼却等によるエネルギーとしての利用は、設備投資額が大きいことが課題である。

(3) 酪農家に必要なこれからのテクノロジーや能力、投資課題について

- ・人口減少による労働力不足問題が顕在化している。
- ・省力化を図るため、ロボット搾乳が急速に普及しているが、酪農に関わる機械・設備コストの高さが課題である。
- ・性別別精液も普及し、クロス・ブリーディング（雑種交配）も大きな話題になっている。



酪農家円卓会議の風景